

「我が人生思い残すことなし」(前編)

きたごう はると
作：北郷 遥斗

※ 前回までのあらすじ ―― 神戸大空襲の後、きみは昭男一人を残し、子供たちを連れて広島の実家に疎開した。そして8月6日の原爆に遭遇し、救援のため街に向かい、そこで見たものは、まさに「生き地獄」そのものの光景だった。一緒にいた町会長はその時敗戦を確信し、取り返しのつかない所まで来たことに呆然となった。――

(尚、ホームページでもこれまでのストーリーを見る事が出来ます。www.kyodo-keiei.co.jp)

終。敗戦

きみ達は、必死に折れそうな心を奮い立たせ、救護所となっている、横川の国民学校へ急いで向った。そこは爆心地からははずれ、かろうじて燃え残って、負傷者が集められていると聞いたからだ。到着した時にはすでに多くの犠牲者で埋め尽され、建物に入り切らない人は校庭に敷いたゴザの上に並べられた。誰もが身体中ひどく焼けただけ、顔は人相も分らない程だった。様々なうめき声と苦痛な叫びが渦を巻いていた。「水を・・・水をくれ！」最後の力を振り絞る様に訴えた婦人はそのまま息絶えた。

きみ達は何をするすべもなく、ただ声を掛け、わずかな井戸水を与えて回るくらいしかなかった。また、全身炭の様に真っ黒に焼けた兵隊らしき人は、こげ臭い匂いをさせ、「苦しい・・・とどめを！早く殺してくれ！」ときみに訴えた。「大丈夫ですよ。今に薬も届きます。



もう少しですよ。がんばりましょう。」と励ましてはみるものの、何のあても、期待もないだけにむなしさだけが胸を刺した。結局その男は、その後も苦しみ続け最後には息を引き取った。「申し訳ないのう、何もできんで。結局死ぬなら、いっそのこと早く楽にさせてあげればよかった」。皆が同じ無念さを感じていた。

その後、3日3晩不眠不休の救護活動が続いたが、歴史上最悪の惨事においては全てが無力で



あり、遺体の山だけが築かれ、荼毘^{ダビ}に付す煙は決して絶える事はなかった。「今日、長崎にも新型爆弾落とされたって！」誰かが教え、瞬く間に皆に知れ渡る事となった。「何て残酷な！人間のする事か！！」「何もかもが破壊されてしもうた。日本が減びてしもうた」。口々に声にし絶望に打ちひしがれていた。

そして8月15日の朝、きみ達は再び山里の実家に戻って来ていた。自治会長が早くから「今日正午から天皇陛下の放送があるから、皆、ラジオの前に集まる様に。」と一軒一軒知らせて回っていた。「何事かな？こんななんてしもうたから・・・。」きみは母に尋ねた。「おそらく激励して下さるんじゃろ。」母は短く答えた。正午ちょっと前には、集落の寄合所の前に置かれたラジオを子供も含めて全員が取り囲んでいた。そして雑音に混じり、陛下の声が流れた。

朕深く世界ノ大勢ト帝国ノ現状トニ鑑ミ非常ノ措置ヲ以テ時局ヲ收拾セムト欲シ慈ニ忠良ナル爾臣民ニ告ク

朕ハ帝国政府ヲシテ米英支蘇四国ニ対シ其ノ共同宣言ヲ受諾スル旨通告セシメタリ

抑々帝国臣民ノ康寧ヲ図リ万邦共栄ノ樂ヲ偕ニスルハ皇祖皇宗ノ遺範ニシテ朕ノ拳々措カサル所曩ニ米英ニ国ニ宣戦セル所以モ亦実ニ帝国ノ自存ト東亞ノ安定トヲ庶幾スルニ出テ他国ノ主権ヲ排シ領土ヲ侵スカ如キハ固ヨリ朕カ志ニアラス然ルニ交戦已ニ四歳ヲ閲シ朕カ陸海將兵ノ勇戦朕カ百僚有司ノ励精朕カ一億衆庶ノ奉公各々最善ヲ尽セルニ拘ラス戦局必スシモ好転セス世界ノ大勢亦我ニ利アラス加之敵ハ新ニ残酷ナル爆弾ヲ使用シテ頻ニ無辜ヲ殺傷シ惨害ノ及フ所真ニ測ルヘカラサルニ至ル而モ尚交戦ヲ繼續セムカ終ニ我カ民族ノ滅亡ヲ招来スルノミナラス廷テ人類ノ文明ヲモ破却スヘシ斬ノ如クムハ朕何ヲ以テカ億兆ノ赤子ヲ保シ皇祖皇宗ノ神靈ニ謝セムヤ是レ朕カ帝国政府ヲシテ共同宣言ニ応セシムルニ至レル所以ナリ

朕ハ帝国ト共に終始東亞ノ解放ニ協力セル諸盟邦ニ対シ遺憾ノ意ヲ表セサルヲ得ス帝国臣民ニシテ戦陣ニ死シ職域ニ殉シ非命ニ斃レタル者及其ノ遺族ニ想ヲ致セハ五内為ニ裂ク且戦傷ヲ負ヒ災禍ヲ蒙リ家業ヲ失ヒタル者ノ厚生ニ至リテハ朕ノ深く軫念スル所ナリ惟フニ今後帝国ノ受クヘキ苦難ハ固ヨリ尋常ニアラス爾臣民ノ衷情モ朕善ク之ヲ知ル然レトモ朕ハ時運ノ趨ク所堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ヒ難キヲ忍ヒ以テ万世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス

朕ハ茲ニ国体ヲ獲持シ得テ忠良ナル爾臣民ノ赤誠ニ信倚シ常ニ爾臣民ト共に在リ若シ夫レ情ノ激スル所濫ニ事端ヲ滋クシ或ハ同胞排擠互ニ時局ヲ乱リ為ニ大道ヲ誤リ信義ヲ世界ニ失フカ如キハ朕最モ之ヲ戒ム宣シク拳国一家子孫相伝ヘ確ク神州ノ不滅ヲ信シ任重クシテ道遠キヲ念ヒ總カヲ将来ノ建設ニ傾ケ道義ヲ篤クシ志操ヲ鞏クシ誓テ国体ノ精華ヲ発揚シ世界ノ進運ニ後レサラムコトヲ期スヘシ爾臣民其レ克ク朕カ意ヲ体セヨ

「何じゃ電波が悪うてよう聞こえんけん」「苦しみに耐えもって戦えていうとられるのかのう」皆が分からないでいると、会長が言い聞かせる様に口を開いた。「負けたんじゃ。戦争は終わった。日本は負けたんじゃ」。「えっ！何で！！」

「そんなの何かの間違いじゃ」。「日本はこれからどうなるんじゃ」。一斉に騒ぎ出す中できみは子供達を抱き寄せ、無言でその将来を憂っていた。

一方、神戸に1人残っていた昭男も、町内で集まった人達と「玉音放送」を聞いていた。この戦争に、自分の命をかけ、必死に勝利を信じる事だけを支えに生涯を捧げて来た者にとっては、この敗北は屈辱であり、死を与えられたも同然だった。「俺は、何の為にこれまで耐え忍んで来たんや！」「これからどう生きろというんや！」昭男は絶望のどん底に突き落とされる思いで失意に打ちひしがれていた。（後編へ続く）



読者の皆様、永らくのご愛読ありがとうございました。前編の本号を持ちまして、しばらくお休みをさせていただきます。1年後にまた再開できますことをお楽しみに・・・。